

VI 特別寄稿

高校生として中学・高校の英語教育について考えること 滋賀県立石山高等学校 3年生 浦川 真緒

1. はじめに

私は中学・高校で6年間英語を学び、様々な経験を通してこれからの英語教育に携わりたいと考え、現在英語教師を目指しています。来春から大学で英語教育を専攻し、自身の夢の実現に向けての学修を始めるにあたって、「17歳の自分が考える英語教育」をまとめたかと考えていました。そんな折、以前から英語ディベートでたくさんのアドバイスをくださったり、英語教育に関する勉強会に誘ってくださったりと、大変お世話になっている大阪女学院大学教授の中井弘一先生から声をかけていただき、この原稿をまとめるに至りました。私は、中学・高校の英語教育について自らの経験を踏まえ、①現在学んでいる事（文法や英単語など）がこの先どうつながるのか知る機会と、②実際に英語を使う機会、の二つが増え、授業でも一般的に行われれば良いと考えます。そのことについて本稿では述べたいと思います。

2. 英語教育の最近の動向について考えること

現在、新聞やニュースで「国際化」や「グローバル人材」などの言葉が叫ばれる中、世間の英語教育に対する関心はますます大きく強くなってきました。実際に政府も日本の英語教育を変えるために、小学校英語の教科化などの政策に取り組み始めています。また、社内公用語を英語に設定する企業も増加してきており、就職する際や大学で学ぶ際にも、英語の必要性は高まってきたように思えます。

そのような中、現在の生徒は英語の必要性をどれほど感じているのでしょうか。私達生徒の日常生活で本当に英語を必要とする機会はほとんどありません。自らの意思で留学している生徒、海外からの留学生を家庭で受け入れている生徒など、日常的に英語を使う必要のある環境に身を置いているならば話は別でしょうが、中学校や高校に通い、英語の授業を受けている普通の生徒にとっては、英語を使用する場面というものはかなり限られているのではないかと思います。こうした現状であるので、「英語力はこれからの日本人にとって必要なスキルである」と声高に主張する世間と、英語の必要性や具体的な使用場面を実感しにくい生徒の間にギャップが生まれているのではないかと感じます。このギャップにより、英語は生徒の将来に必要となる可能性が高いにもかかわらず、勉強しようというモチベーションを得にくいのではないのかと思います。

こうした現状を踏まえて、私は先に述べた二つの機会が中高の英語教育で一般的に行われれば良いのではないかと考えました。

2.1 現在学んでいること（文法や英単語など）がこの先どうつながるのか知る機会

1つめの現在学んでいることがこの先どうつながるのか知る機会というのは、言い換えると、現在学んでいる英語の基礎がどう役立つのかを知るといえる機会です。

中学・高校での英語の授業で、私達はたくさんの英文法、英単語、イディオムを学びます。しかし、こういった類のものを学ぶことで何が出来るのかを知る機会というのはそう多くありませんでした。英語には暗記事項がたくさんありますが、こうした基礎を学ぶことでどのようなことができるのかを具体的にイメージすることが出来れば、英語を学習するモチベーションの1つとなるのではないのでしょうか。例えば、将来海外の友人に手紙を書くことになったとき、社会人になって英語でプレゼンテーションをしなければならなくなった時など、中高で学んだ単語や文法といった知識が必要となる場面はたくさんあると思います。今勉強している、覚えなくてはならないことが将来どのように役立つかを知れば、実践に向けて勉強することができるようになるため、より自主的な学びが期待できるのではないのでしょうか。

学んでいることが何につながるのか、またどのように役立つのか、といった実用性のことばかりに目がいくのは学問という観点から考えるとあまり良いことではないのかもしれませんが、しかし、英語力の基礎を確立するため、と暗記中心の勉強を強いるだけよりも、将来のイメージをもって勉強に臨む方が良いのではないのでしょうか。おそらくスピーチやプレゼンテーションなどに役立つ発信・主張できる英語力こそが現在社会で求められている英語力であり、そういった場面での英語の使用を想定して勉強することが必要なのではないかと思います。

そのためにこれからの英語教育が必要となってくるのが、授業デザインです。授業を講義中心で進めているだけではなく、必要なアウトプット（手紙を書くことや、メール文を作成する）が必ず学習活動の中に組み込まれていることが重要だと考えます。かくして、生徒には必ずアウトプット（発表）が待っており、聞く一方の受け身授業から、最後に発信できるようになるために、

積極的に聴く態度になるからです。コミュニケーション力はアウトプットなくして育成できるものではありません。

2.2. 実際に英語を使う機会

そして2つめの実際に英語を使う機会については、スピーチやレシテーション、ディベート、模擬国連などが活動例として挙げられるかと思います。「百聞は一見にしかず」というように、実際に学んできた英語を使ってみると、「この文法はこういう風に使うのだ」という発見や気づきがあるかと思います。また教室で座って授業を受けているだけでは、分からない英語の魅力に気づくことが出来るかもしれません。英語は学習教科といえども、1つの言語なので使ってこそ意味があるのではないかと考えます。

こうした大きな発表活動を時間数が限られている授業で導入するのはとても大変かもしれません。しかし任意参加などにしてしまうと、英語が苦手な生徒や自信のない生徒が参加しにくい状況になってしまうので、全ての生徒がこうした経験をできるようにするためにはやはり授業で取り入れるのが最も良いかと思います。長期休業中や、週末課題、授業の導入部分などを利用すれば不可能ではないと考えます。本格的に行うものでなくても、とにかくやってみることが生徒の英語に対する視野を広げるためにも大切だかと思えます。

どうしても授業で取り入れることが難しかったとしても、こういった活動があることを生徒に対し伝えるだけでも効果があるのではないかと思います。ほとんどの高校生はそういった活動があることすら知らないと思うので、「こんなことが出来るよ」というふうに英語に対する間口を英語の好き嫌い関係なく全ての生徒に対し広げていくことが必要ではないでしょうか。

3. おわりに

私は高校に入ってから、素晴らしい先生方に出会った事もあり、授業ではスピーチや音読、シャドーイング、また授業以外にも、英語ディベートやレシテーションなど、英語を使った活動に参加する機会に多く恵まれました。これらの経験のおかげで、英語力が向上したと実感することが出来ただけではなく、以前は少し苦手意識を感じていた英語を将来の仕事にしたいと考えるに至るまでになりました。

しかし、誰もがこのような機会に恵まれているわけではないかと思えます。私は幸運にも、たまたま私の高校が英語ディベートを始めただけの時期に入学し、音読などを積極的に授業に取り入れようとしている先生方に受け持ってもらえたからこそ、英語の楽しさに気付くことが出来ました。もしも、私の先生が声をかけてくださっていなければ、私はディベートやレシテーションを知ることもなかったし、こうしてこの文章を書く機会もなかったかと思えます。この高校3年間で無ければ英語教師を目指していたかどうか正直なところ分かりません。

だからこそ、現在学んでいる英語がどう将来に役立っていくのかを知る機会、また英語を実際に使用する機会がある授業がどの学校でも一般的に行われるようになれば良いかと思えます。一部の幸運にも整った環境に出会うことのできた生徒や、始めから英語が好きで学びたいと思っている生徒だけでなく、全ての生徒がこういった機会を有するべきです。そうすれば英語に少しでも肯定的なイメージ、もしくはもうちょっと勉強を続けてみようかな、といった気持ちを持つことのできる生徒が増えるのではないかと思えます。もちろん全ての生徒に効果があるかどうかは分かりませんが、英語教育の拡充を世間が求めているのなら何らかの措置を取るべきではないでしょうか。生徒が他のどの言語でもなく英語を自主的に学ぶためには、生徒自身が英語の必要性を理解し、初めに述べたような世間とのギャップを埋めることのできる、こうした機会が必要だろうと思えます。

私の将来の展望として、授業を通して生徒に英語をもっと学びたいと思わせるような授業のできる英語教師になりたいと思っています。教師になることが出来れば、受験のためだけではなく、生徒が実際に英語を使ってコミュニケーションを取る機会を多く作り、自らの伝えたいことを少しでも英語で話すことが出来るような授業を行いたいと考えています。そのために大学では授業を行う上で不可欠な英語の教授法を身につけるべく、理論と実践の両方をしっかり学び、英語教師としての基礎を確立したいと思っています。また、学外の勉強会に参加したり、多くの本を読んだりすることで、自らの視野を広げるとともに、先生方がどのような取り組みをなさっているのかを学ばせていただきたいと考えています。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった中井弘一先生と、何度も相談に乗ってくださった石山高校の戸田行彦先生に心よりお礼申し上げます。

※ 浦川真緒さんは2014年4月から京都にある教員養成系の大学で教員になるための学修をされます。教員志望が強く、高校在学中に本学の勉強会「英語の教え方教室」にも参加されました。浦川さんのその情熱に感動を覚え、石山高等学校戸田教諭を通して浦川さんに今回の特別寄稿をお願いいたしました。高校生がどのように考えているかを知ることが、皆さんの授業設計にも参考になると思えます。